

紅山文化の出土玉器に関する一考察

——馬蹄形玉筒について

三木友里

初めに

中国におけるこれまでの発掘調査では、旧石器時代の出土品には玉器はまだ発見されていない。しかし、出土品から、七、八千年前の新石器時代には、玉器の製造、使用がすでに始まっていたことが明らかである。当時の玉材は硬くて、木目が細かく、かつ色の美しい彩石で、いわゆる広義の玉であった。¹⁾玉器の出土品は現在の中国の東北、山東、江淮、江浙および広東地方などに分布しており、用途別では玉斧などの精算用具及び耳飾り、佩玉などの装身具、祭器と見られるものである。中でも約五千年前の紅山文化の遺跡から出土した玉竜、勾雲形器、馬蹄形玉筒などは、彫琢繊細で、形は独特であり、他の地域では見られない特徴を有し、材質は岫岩玉に類似しており、蛇紋石（鮑紋石も含む）類に属する。新石器時代の晩期になると、玉の美し

さが次第に認識されるようになり、玉器は実用から離れて装飾品になるようになった。一般にこの時期が玉器の発生期とされている。²⁾

玉器が金石学や考古学の対象とされるようになったのは、あまり古いことではない。最も古い金石学の玉器の図録は、宋の呂大臨が一九二二年に編纂した『考古図』で、一四件の玉器が記録されている。元代の至正元年（一三四一年）に成立した朱德潤の『古玉図』は最初の玉器専門の図録である。清朝になると、文献考証が発展し、古玉についての研究が盛んとなり、清の光緒十五年（一八八九年）に呉大澂が編纂した『古玉図考』は、古玉の最初の学術的な著作とされている。近代では、郭玉鈞の『古玉新詮』が古典文献を利用して、出土品の玉器について論述しており、現代では、北京故宫博物館の創立時の設置委員で、その玉の部門の責任者であった那志良が、玉器研究の第一人者であり、『古玉通釈』、『古玉鑑裁』、『玉器辞典』、『古玉論文集』など多数の著作がある。

中国以外の研究者としては、日本における中国の古美術の権威である杉村勇造と、『支那古玉概説』、『有竹斎蔵古玉図譜』の著書である浜田耕作が挙げられるが、欧米にも中国から流出した古玉の所蔵品のコレクションに関する研究者がおり、数々の著作が発表されている。³⁾玉器の出土品は大部分が墳墓から発掘されたもので、その用途の解明は古玉研究の中の最も興味深い分野である。これまでの研究成果によって明らかにされたところでは、副葬品あるいは死体の腐敗防止のための玉器が多い。しかし、用途がどうしても解明できないものもある。上述した紅山文化で出土した馬蹄形玉筒（図版Iなど参照）もその一つである。

馬蹄形玉筒の用途についてはこれまで四説がある。また、楊伯達の

『中国古代玉器發展歷程』⁽⁵⁾や、傅忠諫の『古玉精英』⁽⁶⁾では、馬蹄形玉筒についてそれぞれ言及あるいは掲載されているが、その用途については全く考察されていない。

第一章 馬蹄形玉筒の用途についての四説

馬蹄形玉筒の用途について、ルネーイヴォン・ルフエール・ドージュアンセ (Rene-Yvon Lefebure d'Augence)⁷、スタンレー・チャールズ・ノット (Stanley Charles Not) 及びマックス・レール (Max Loehr) は、それぞれ、髪飾り説、米を掬う道具説、カフス説をとっているが、それらはいずれも、それぞれ特定のコレクション中の特定の玉器について述べられたものである。また、那志良は以上の説についての疑問を提起した上、自説としての袖飾り説を提示している。

第一 髪飾り説、道具説及びカフス説

一 ルネーイヴォン・ルフエール・ドージュアンセの髪飾り説

ルネーイヴォン・ルフエール・ドージュアンセは、「エイヴァリー・ブランテーシ・コレクションにおける中国の玉」(Chinese Jades in the Avery Brundage Collection) において、馬蹄形玉筒 (図版I) について、髪飾りと考えられるとし、年代については戦国時代もしくは西漢時代 (紀元前五—紀元前一世紀) としている。また、「これらの楕円形の玉器は供物としての穀物を量るものとの説がある一方、儀式のためのカフスとしてペアで造られたものとの説もある。」と紹介している。⁽⁷⁾

二 スタンレー・チャールズ・ノットの米を掬う道具説

スタンレー・チャールズ・ノットの馬蹄形玉筒が米を掬う道具であ

ったという説については、その原文と図版は入手できないが、那志良は「米国のシカゴの野外自然歴史博物館 (Field Natural History Museum) 所蔵のバール・コレクション (Bahr Collection) の中にも、同様の器 (馬蹄形玉筒—筆者) があり、スタンレー・チャールズ・ノットは一種の米を掬う道具としている。(Chinese Jade Throughout the Ages, P. 15. を参照)」と紹介している。

また、上述した「供物としての穀物を量るものとの説がある」というドージュアンセの記述はスタンレー・チャールズ・ノットの説を指しているものと見られる。

三 マックス・レールのカフス説

マックス・レールは二個の馬蹄形玉筒について「灰緑色に淡い褐色班紋がある固い楕円形の玉筒」と記述した上、用途及び年代について、疑問を抱きながら「儀式用カフス(?)」「西周時代(?)」としている。(図版II、図版III参照)⁽⁸⁾

第二 那志良の指摘と腕飾り説

那志良は『古玉研究の未解決の諸問題』と題する講演の「筒形器の使用問題」の部分において、馬蹄形玉筒について、上述の三人と説を紹介しながら、腕飾り説を提起している。

那志良はまず「一種の筒形の器で、一端はやや細く切り口が直角であり、他方はやや太く切り口が斜めとなっており、切り口の断面は楕円形である。現存するものを私は米国で五、六件見た(図版IV)。……それらの形は、すべてやや平の円筒形である。……異なっているのは、切り口の傾斜度がやや違うことである。先史の紅山文化⁽⁹⁾の中でも一個が発見された……これらの器物は何であるか。学者の意見は分

第三 諸説の検討

かかれている。^①と述べ、次いで、ルネーイヴォン・ルフマーブル・ドージャンセの飾り説を紹介した上、「ただし、氏はどのようにして髪に付けるのかについては述べていない。一つの孔もないのにこのような大きくて重い玉をどうすれば髪に付けることができたのだろうか。」^②とし、さらに、スタンレー・チャールズ・ノントの米を掬う道具説について述べ、「この器は管形で、底がなく、米を掬おうとすると、片手で器の一端を塞がなければならないから、たいへん不便であろう。」^③と指摘する。

そして、那志良としてはマックス・レールのカフス説には大筋においては賛成であるとした上で、「私は米国のミネアポリス美術研究所 (Minneapolis Institute of Art) で目次を審査、編集していたとき、そこにあるこの種の器物 (図版IV-B) を一個見たことがある。私は「腕飾り」と判断した。ヒントとなったのは、中国の東北地方の人の服装である。彼らの服装に「馬蹄袖」があり、その形は馬の蹄と似ており、一端は細く、もう一端は広く、傾斜度があるが、この筒形器と極めて相似している。腕に付けたとき、より広い一方が前に向き、その延ばした部分が手の甲にかぶさり、短い面が下になって、手の動きを邪魔しないようになっていいる。」^④と述べ、その上で自説について「マックス・レールは「固いカフス」と判断したが、私の見解は異なる。私は最初筒形器の形は、「馬蹄袖」に似ているから、袖の口であろうと考えたが、孔がなく、袖とつながることができないことから、最終的に腕の飾り物と判断した。」^⑤とし、マックス・レールのカフス説を修正して、腕飾りとする説を提示している。

次に、馬蹄形玉筒の用途に関する以上の諸説の疑問点について若干検討してみたい。

一 所蔵の馬蹄形玉筒の年代について

馬蹄形玉筒の年代について、髪飾り説を唱えるルネーイヴォン・ルフマーブル・ドージャンセは戦国時代もしくは西漢時代(紀元前五—紀元前一世紀)とし、カフス説のマックス・レールは西周時代と推測している。これに対し、那志良は、上述のように「先史の紅山文化の中でも一個が発見された。」と述べているが、紅山文化の年代は、ほぼ紀元前五千年前から紀元前三千年前の間とされているから、戦国時代にしろ、西周時代(紀元前十一世紀—紀元前七七一)にしる、いずれも紅山文化とは約二千年ほど年代の隔差がある。

そして、現在まで、紅山文化の出土品(第二章に詳述する)を除けば、その他の時代においては上述の諸氏が検討の対象としたコレクシオン中の馬蹄形玉筒と類似したものが発掘されたという報告は見られないのである。

しかし、ルネーイヴォン・ルフマーブル・ドージャンセ、マックス・レール、そして那志良が取り上げた馬蹄形玉筒のコレクションは、いずれも中国国外に存在するものであり、その性質上、流出品、即ち古墳から盗掘されて、転々と国外に流出したものである可能性が非常に大きいと思われる。そうだとすると、その出土地や年代を推定する手がかりも乏しく、また年代の確定されている対照できる器物もなかったことが推測されるが、以上の戦国時代や西周時代と言う推定もその具体的な根拠を挙げておらず、それらの年代の推定はいずれも極めて確実性の少ないものといつてよいと思われる。

二 カフスカ、腕の飾り物か

マックス・レールのカフス説は、那志良によって腕の飾り物に修正されているが、那志良の指摘する、孔がないのであるから服装とつなぐことができないという点は、確かにカフス説の不十分さを証明していると言えよう。しかし、那志良の腕飾り説の理由も必ずしも充分とはいえない。

腕飾り説の主な根拠は「馬蹄袖」の存在にある。清朝の礼服あるいは官服の袖の延長部分が通常「馬蹄袖」と呼ばれるもので、その馬蹄袖の形は頂部の欠けた円錐形で、材質が服より少し硬いため、ぴんとした状態となっている。普通の場合、広い方の一端は上に向き、狭い方の一端は服の袖と一体になっており、手の全体は袖の外に出した状態で着用する。しかし、例えば皇帝に対し丁寧な礼を行う場合には、その袖の広い一端を下に向けてるように翻し、手にかぶせ、ひざまずき、両手を着地して礼拝するのであり、その形が、馬の蹄のように見えるというのが「馬蹄袖」の名の由来である。清の統治者であった満民族は、皇帝や上司に対して、自己を「奴隸」とし、皇帝や上司を「主子」（主人）と呼び、自分を「奴才」（奴隸）と呼んでいたが、元来騎馬民族であるところから、馬蹄袖の存在も自己が馬のような奴隸であると言う意識の外面的表現であるとする説がある。いずれにしても、紅山文化は満民族の出身地の東北地方に存在したものであるが、馬蹄袖は年代的には紅山文化より遥かに発展した段階の後代の服装であり、紀元十世紀以降発展した民族の服装が、それより四、五千年前の馬蹄形玉筒の範型であるとするのは、かなりの無理があるといえるべきであろう。

三 孔について
ルネーイウォシ・ルフエーブル・ドージャンセの髪飾り説について、

那志良は馬蹄形玉筒に孔がないところから、髪に付けることができなると指摘した。しかし、一九八〇年代に次々と発表された紅山文化についての発掘報告は、有孔の馬蹄形玉筒があると報じている。次に、その詳細について見ることにしよう。

第二章 馬蹄形玉筒に関する三つの発掘報告

一九八四年から一九八六年にかけて、中国で発表された、少なくとも三つの紅山文化に関する論文や発掘報告が馬蹄形玉筒に関連して述べている。それぞれの要旨は次のとおりである。

第一 『遼寧凌源県三官甸子城子山遺跡の発掘報告』¹⁶

一 城子山紅山文化遺跡の位置

『遼寧凌源県三官甸子城子山遺跡の発掘報告』（以下『城子山報告』という）によると、城子山遺跡は遼寧省凌源県から南へ八キロメートルの地点にあり、建平県と凌源県との接するところにある。北東方面に八キロメートルのところには建平県の牛梁河紅山文化の墓地がある（本章第二参照）。

発掘は一九七九年に行われ、発掘面積は二〇〇平方メートル余り、三個の紅山文化の墳墓を発見し、それぞれM1、M2、M3と名付けられた。M2で馬蹄形玉筒（原文は「馬蹄形玉箍」）一件を発見した。

二 M2の情況

M2は被葬者一人の石棺墳墓で、棺内には骨がほとんどなく、二本の足骨だけが残されていた。しかし、九個の副葬品の位置は明確であり、その中の一個の馬蹄形玉筒が被葬者の胸の辺りにあった（図一参照）¹⁷。

三 M2の馬蹄形玉筒(番号M2・4)

『城子山報告』は発掘された馬蹄形玉筒について、以下のように記録している。

馬蹄形玉筒 一件。M2・4。円形傾斜口、筒形、上部は太く、下部は細い。平たい円型、両端の平面は楕円形。下の一端に二つの小さい孔がある。長さは14.2、太い一端の直径は6.8—9.5cm、細い一端の直径は6.2—7.2cm。淡い緑の軟玉で磨かれている。副葬品として、腰部の左側にある(図版V)。¹⁸⁾

しかし、ここで馬蹄形玉筒M2・4は「腰部の左側にある」とされているが、右報告の前文は「胸の辺りにある」と述べている。図一と対比すると、「胸の辺り」というのがより正しいと思われる。

第二 『遼寧牛河梁紅山文化「女神廟」及び積石塚群の発掘報告』¹⁹⁾

一 牛河梁紅山文化遺跡の位置と分布

牛河梁は遼寧省西部の凌源県と建平県との接するところにあり、東北の方面一二・五キロメートルに建平県があり、南西一五キロメートルに凌源県がある。

『遼寧牛河梁紅山文化「女神廟」及び積石塚群の発掘報告』(以下『牛河梁報告』という)によると、牛河梁紅山文化遺跡は一九八一年に発見され、調査の結果、一・二平方キロメートルの面積に分布していることが判明した。一九八三年ないし一九八五年に発掘された「女神廟」と積石塚地点はそれぞれ牛I・J1と牛IIと名付けられた。

二 牛I・J1「女神廟」の土偶及び牛II積石塚の馬蹄形玉筒

1 牛I・J1には大量の土偶の破片があり、その中では土人形が最も多く、次は動物の像の破片であった。主な土人形破片は、次のとお

りである。

① 頭部破片(J1B・1)。人間の頭とほぼ同じ大きさで、頭頂部と後部が欠けている。頭に色が着いており、出土したときは、まだあでやかさを保っていた。

② 肩破片(J1B・5)(図版VI-3)、肩と上膊破片(図版VI-4)。J1B・5の方は女性の肩の特徴を持つと見られている。

③ 乳房破片(J1B・6)(図版VI-5)。少女体型の右側の乳房と見られ、比較的に完全な形となっている。²⁰⁾

2 牛IIに四つの積石塚があり、二件の馬蹄形玉筒を出土した。

① その第一積石塚Z1の第四墓M4に馬蹄形玉筒(原文は玉籬形器)一個(図版VII)と豚竜形玉飾二個合わせて三個の玉器が発見された。墓は板石でできた墓室で、保存状況がよく、人骨と副葬品の位置を知ることができた(図版VIII)。注目したいのは、馬蹄形玉筒M4・1が、上述の『城子山報告』馬蹄形玉筒M2・4と異なつて、「胸の辺り」ではなく、頭骨の下に横に置いてあったという点である。

馬蹄形玉筒M4・1は深い緑玉であり、城子山のM2・4より、一回り大きく、形などはM2・4とほとんど同じである。そして、平口の両側にそれぞれ小さい孔がある。(図一三)

② Z1の第十五墓M15で発掘された五件の玉器の中でも、一個の馬蹄形玉筒M15・1(図一三)は頭頂部の下にあり(図一四)、埋葬法はM4・1と一致しているが、大きさは城子山のM2・4と同じである。両端の縁が擦り切れている。²²⁾

三 牛河梁紅山文化遺跡の年代

『牛河梁報告』には、科学的な測定の結果、牛河梁紅山文化遺跡の年代は五千五百年前から五千年前までの、紅山文化後期に入った時期

であり、約五百年にわたって存在していたことが判明したと記載されている。²³

第三 『遼河流域の原始文明及び竜の起源』²⁴

一 馬蹄形玉筒の標本

『遼河流域の原始文明及び竜の起源』（以下「遼河」とする）はより広範囲、即ち遼寧省西部及び内モンゴルの赤峰地区など遼河流域における紅山文化に属する玉器について論じ、その中で馬蹄形玉筒にも触れている。

『遼河』によると、右の範囲内で、馬蹄形玉筒は七件発見された。まず、取り上げられた一件は、「三官甸子墓地」で出土し、対照した結果、本章の第一で取り上げた『城子山報告』の馬蹄形玉筒M2…4と同種の物と判明した（図版V参照）。

そして、一九八一年に発掘された牛河梁墓地の地元の村民から、同墓地で出土したとされる馬蹄形玉筒二件を収集したという。

また、『遼河』の中で、牛河梁で出土した馬蹄形玉筒の標本の一つ（図一五）については、「墨緑色の玉で、高さは16.4cm、筒形、平口の一側の両側に対称の缺口がある（ある標本は双孔がある）。斜口の一側の縁は薄くて鋭い刃に似ている」とされている。²⁵

二 馬蹄形玉筒の年代の判断

馬蹄形玉筒を含む紅山文化の出土玉器の年代について、『遼河』は、「上述の玉器は、一部が伝世品として著作に掲載されたり、博物館のコレクションになったりしているが、年代は商（殷）周時代、あるいは更に遅い時代と断定されている」と述べながら、米国のフォグ美術館（Fogg Art Museum）が馬蹄形玉筒を所蔵していると注釈を付し

ている。²⁶

『遼河』はまず、玉器の造形と表現方法について考察し、これらの玉器の主な造形は商周代の玉器に見られないこと、装飾模様はほとんどなく、商周代の玉とかなり異なっていることを指摘している。

そして、出土地点の分布と地層の関係の考察によって、これらの玉器は紅山文化の遺物であると判断されている。²⁷ また、第二章で述べたように『牛河梁報告』は、科学的方法による測定によって、牛河梁紅山文化遺跡の年代が五千年以前であることが判明したとしている。

第三章 諸説の再検討

第二章に触れた幾つかの文献は、馬蹄形玉筒の用途については言及していないが、そこで提供されている資料に基づいて、用途に関する疑問点に対する回答が得られないであろうかという点について以下に検討したい。

第一 出土の位置

ルネーイウォン・ルフエーブル・ドージャンセの髪飾り説、スタンレー・チャールズ・ノットの米を掬う道具説、マックス・レールのカフス説、そして那志良の腕飾り説において検討の対称とされた馬蹄形玉筒のコレクションの場合、第一章の第二の一で述べたと同様の理由から、その出土時の墳墓内での発見位置については、恐らくいずれも不明と思われる。

これに対し、第二章で述べた一九八〇年代に発掘された紅山文化での出土品のうち埋葬位置が保存良好で、かつ被葬者との関係位置が報告で明記されているのは、以下の三件である。

- ① 城子山遺跡のM2・4の位置は、胸の辺りである。
 ② 牛河梁報告遺跡の牛IIのZ1M4・1の位置は頭骨の下である。

③ 同上のM15・1の位置は頭頂部の下である。

以上からすると、馬蹄形玉筒は何らかの形で被葬者の頭部と関係があるということが推測されよう。

第二 紅山文化の年代の服装と飾り物について

スタンレー・チャールズ・ノットの米を掬う道具説に対する前記第一章第二で紹介した那志良の指摘は、極めて正当であると思われる。しかし、それ以外の髪飾り説、カフス説及び腕飾り説は、いずれも当時の服装や装飾と関連するものであるが、極めて古い時代の服装の状態については判断の材料が極めて乏しいのが実状である。それは、発掘された墳墓からは判断し難いのが通常である。約五千年前の新石器時代の紅山文化時代の人間はまだ裸体であったか、あるいは獣の皮でつくられた衣服をまとっていた可能性が強く、繊維や絹の服を着ていた可能性は少ないとも考えられる。

この点、前記の第二章の第一で触れた『牛河梁報告』で報告された「女神廟」の発掘状況を検討すると、当時の人間は裸体あるいは裸体に近い状態で生活していたという間接的な推測ができるかと思われる。

即ち、「女神廟」と名付けられている遺跡で発見された女性の土人形の肩(図版VI-3)と乳房の破片(図版VI-5)は、実物に極めてよく似た形であり、他の論文によると、発掘された乳房の破片は、「ほぼ実物通り作られた」^{②③}、どの破片にも突起している乳首がある^④。

紅山文化の出土玉器に関する一考察 三木友里

と報告されている。もし、この人形が衣服を着せる土人形であるならば、これほど、精密に作る必要はないと思われる。したがって、この「女神」は裸体の像であったであろうと推測することができるのではあるまいか。そして、その「女神」の像は、当時の生活にどのような役割を果たしていたかは憶測の域を出ないが、いずれにしろ、その姿は当時の人間の生活ぶりを反映していると考えるのが自然であろう。そのような憶測が許されるとすれば、当時の人間の姿は衣服をまとっていないものであったと考えられるであろう。

このように、衣服というものが存在しなかったとすれば、馬蹄形玉筒をカフスや、馬蹄袖に関連づけられた腕飾りである判断をすることは無理があるといえよう。

右に述べたことは推測に止まるが、しかし、当時衣服が存在したと直接判断できる資料が全くないことは事実であり、カフスや腕飾りが衣服の発展段階としてはかなり高度の段階に属することも考えられる。カフス説や腕飾り説はかなり大きな難点を持つといふべきであろう。

また、カフスや馬蹄袖に基づく腕飾りであるとするれば、ペアで用いられると考えるのが合理的であるが、しかし、同一の墳墓で、馬蹄形玉筒がペアで発掘された報告はまだないのである。

第三 有孔の馬蹄形玉筒の存在

以上述べたことを総合すると、馬蹄形玉筒の用途に関する諸説の中では、髪飾り説が現時点では最も合理的といつてよいと思われる。『城子山報告』による馬蹄形玉筒M2・4の出土位置が、胸の辺りであることはその難点であるが、例えば、城子山M2の被葬者の頭部の位置には「勾雲紋玉飾」という玉器が置かれており(図-1参照)、

そのために邪魔にならないように、馬蹄形玉筒は胸の辺りに置かれたという可能性もあり得よう。

那志良は「一つの孔もないのに、このように大きく、重い玉を、髪につけることができたのだろうか」と指摘したが、第二章で述べたように三件の馬蹄形玉筒ではその平口の一側の側面に、二つの小孔が対称的に存在している。また、このような大きな玉の髪飾りは人間が生きているうちに用いたものではなく、専ら副葬品、即ち後の時代のいわゆる「明器」として作られたのではなからうか。そうであるとすれば、埋葬するとき、死者の長髪を筒の中に入れ、小孔に笄を用いて止める場合もあり、また小孔を省略して、ただ長髪を筒の内に入れるだけの場合があったとしても不思議ではない。もともと、そのような省略があったとすれば、それはやや時代が下ってから行われたということになるであろう。

終わりに

以上、紅山文化に関する一九八〇年代の新しい発掘報告を手がかりとして、馬蹄形玉筒の用途についての試論的考察を行ってきたが、この問題についての解明は基本的には更に多くの発掘例を待たねばならないというのが現状である。将来現れるであろう新しい資料による再検討を今後の課題としておきたい。

(一) 一般教育 助教授 日中比較文化論

注釈

(1) 中国最古の辞典とされる「説文解字」(紀元一世紀ごろ後漢の許慎の著)には、「玉は石の美なるものなり。」とあり、古く中国では、美しい石をすべて玉と称したのであり、ルビー、サフ

アイア、トルコ石、瑪瑙、水晶なども含む広義に用いられていた。しかし、近代になると、玉はより狭い意味で用いられるようになり、軟玉と硬玉とを指すようになった。軟玉は鉱物学上「角閃石」ないしネフライト(Nephrite)と呼ばれるものであり、色により白玉、青玉、碧玉、黒玉などに分けられ、硬玉は「輝石」ないしジェイダイト(Jadeite)と呼ばれており、翡翠のことである。

(2) 中国の新石器時代の文化の一つで、一九三五年遼寧省赤峰紅山で初めて発見されたところから、紅山文化と名付けられ、主に遼寧省の西部に分布している。

(3) 「中国古代玉器発展歷程」 二二六頁参照。

(4) 「研究玉器之図籍」(古玉論文集) 四五三―四七二頁。

(5) 「中国古代玉器発展歷程」 三頁参照。

(6) 「古玉精英」 一六頁の挿図参照。

(7) 「Chinese Jades in the Avery Brundage Collection」 五〇―五二頁。

その訳文は次のとおり。

図版一八

楕円形管、髪飾りと考えられる。

淡い緑に褐色の斑紋がある。

戦国時代もしくは西漢時代(紀元前五―紀元前一世紀)

高さ 六インチ B60J26

これらの玉器は、かつてある種の特異な役割を果たしていたという事実があるにもかかわらず、それについての具体的なことはまだ判明していない。(原注…これらの楕円形の玉器は供物としての穀物を量る道具との説がある一方、儀式のためのカフスとしてペアに造られたものとの説もある。)これらの玉器は比較的大きく、滑らかで、非対称的な輪郭をもち、装飾的な図案が全くないという特徴を備えている。この最後の特徴は、全体的に派手な装飾が多かったとされているあの時代に合致しない。このような質素な玉器の魅力の一つは、玉石そのものがもつ視覚的・触覚的感覚を充分高める特質にあるのである。

(8) 「古玉研究中幾個未解決的問題」(故宮學術季刊) 第三卷・第二期 一一二頁。
(9) 説明文は次のとおり。

323 儀式用カフス(?)

灰緑色に淡い褐色の斑紋がある固い楕円形の玉筒。上の縁は後ろから急な角度で傾斜し、低いところに窪みと割れのような疵がある。狭い底部の縁は平でなく、擦り切れがある。外面は滑らかであるが、光沢はない。西周時代(?)

長さ 113mm・狭い一端の直径は 70mm・厚さ 7mm・重さ 298g 1943. 50. 627

324 儀式用の大きなカフス(?)

青い緑と淡い黄色の玉器に斑紋があり、表面に付着している土の跡がある。形は No. 323 と大体同

様で、上の縁は広く、傾斜度は穏やかである。下の縁は狭く平らである。後ろに上の縁と隣接して、四本の同心の半楕円形の隆起線がある。外の表面は滑らかであるが、光沢はない。内の面はそれほど丁寧に加工作っていないようである。西周時代(?)
 長さ 189mm : 狭い一端の直径は 112mm : 厚さ 7mm : 重さ 1.034g。1943. 50. 628
 出版: Winthrop Retrospective,
 No. 14.

(Ancient Chinese Jade from the Grenvill L. Winthrop Collection in the Fogg Art Museum (By Max Loehr) により、筆者が訳した)

(10) 原注省略、本稿注釈(2)参照。

(11) 『古玉研究中幾個未解決的問題』〈古玉論文集〉一頁。

(12) 同右 一頁。

(13) 同右 三頁。

(14) 同右 三頁。

(15) 同右 三頁。

(16) 『遼寧凌源縣三官甸子城子山遺址試掘報告』〈考古〉一九八六年 第六期 四七九—五一〇頁。

(17) 同右 四九九頁。

(18) 同右 五〇〇—五〇一頁。

(19) 『遼寧牛河梁紅山文化「女神廟」与積石塚群発掘簡報』〈文物〉一九八六年 第八期 一〇一—一七頁。

(20) 同右 五頁。

(21) 同右 九頁。

(22) 同右 一二頁。

(23) 同右 一七頁。

(24) 『論遼河流域の原始文明与龍の起源』〈文物〉一九八四年 第六期 一一—二〇頁。

(25) 同右 一三頁。

(26) 同右 一四—一五頁参照。

(27) 同右 一五頁。

(28) 同右 一七頁注①。

(29) 同右 一五頁参照。

(30) 『牛河梁紅山文化女神頭像的發現与研究』〈文物〉一九八六年卷 第八期 二〇一頁。

(31) 同右 一八頁。

(32) 『遼寧凌源縣三官甸子城子山遺址試掘報告』〈考古〉一九八六年 第六期 四九九頁。

参考文献

紅山文化の出土玉器に関する一考察 三木友里

- 那志良 『古玉論文集』 国立故宫博物院 中華民國 七十二年(一九八三年) 七月
 那志良 『玉器辞典』 爰爰出版社 中華民國 七十二年一月(一九八二年)
 那志良 『古玉研究中幾個未解決的問題』〈故宫學術季刊〉第三卷 第二期 一一—一八頁 中華民國 七十四年(一九八五年) 冬季
 楊伯達 『中国古代玉器發展歷程』〈中国美術全集・工艺美术品編九・玉器〉 二一六頁 (文物出版社・一九八六年七月)
 楊伯達 『中国古玉研究叢論五題』〈文物〉一九八六年 第九期 六四—六八頁
 三木友里 『中国の玉と日本』 立正大学教養学部開設二十周年記念公開講座講演集 一五四—一八九頁 (一九八七年三月)
 三木友里 『周禮』考工記玉人篇の圭・冒について』 立正大学教養学部論集「ヘロークス」第二〇号 二二八—二九九頁
 傅忠護 『古玉精英』 中華書局(香港) 有限公司社 (一九八九年一月)
 李恭篤 『遼寧凌源縣三官甸子城子山遺址試掘報告』〈考古〉一九八六年 第六期 四九七—五一〇頁
 高美旋・李恭篤 『遼寧凌源縣三官甸子城子山紅山文化遺存分期探索』〈考古〉一九八六年 第六期 五三—五三四頁
 遼寧省文物考古研究所(方殿春・魏凡執筆) 『遼寧牛河梁紅山文化「女神廟」与積石塚群発掘簡報』〈文物〉一九八六年 第八期 第一—一七頁
 孫守道・郭大順 『遼寧牛河梁紅山文化女神頭像的發現与研究』〈文物〉一九八六年 第八期 一八—二四頁
 孫守道・郭大順 『論遼河流域の原始文明与龍の起源』〈文物〉一九八四年 第六期 一一—二〇頁
 許慎 『漢』『說文解字』 (中華書局影印 一九六三年二月)
 図版目次
 図版 I : Brundage Collection 五〇—五一頁
 図版 II : Fogg. Jade, p. 216, 図版三三三
 図版 III : Fogg. Jade, p. 217, 図版三三四
 図版 IV : 『故宫學術季刊』 第三卷 第一期 二頁
 図版 V : 『考古』 一九八六年 第六期 図版貳—5
 図版 VI : 『文物』 一九八六年 第八期 図版壹
 図版 VII : 『文物』 一九八六年 第八期 カラー 図版壹—3
 図版 VIII : 『文物』 一九八六年 第八期 カラー 図版壹—1
 図目次
 図一 : 『考古』 一九八六年 第六期 四九九頁 図四

図一三「文物」	一九八六年 第八期 九頁 図二一
図一四「文物」	一九八六年 第八期 一三頁 図二〇
図一五「文物」	一九八四年 第六期 一四頁 図六

図版 I (Brundage Collection 50~51頁)



Plate X VIII

OVAL TUBE, Possibly a Hair Ornament

Light green with brown markings

Warring States or Western Han period (5 th-1 st century B.C.)

H. 6 in B60 J226

SHELL-SHAPED ARTIFACT WITH A CENTRAL PERFORATION, Possibly a Hair Ornament

Bluish grey with black markings

Warring States or Western Han period (5 th-1 st century B.C.)

L. 33/4 in. B60 J609

Here are two examples of a small group of objects which have not been properly identified in spite of the fact that they must have fulfilled some very specific functions.⁽¹⁾ They are characterized by relatively large dimensions, smooth asymmetrically unexcepted for a period which is best known for its ebullient overall decoration. One of the charms of unostentatious objects of this type is that they fully enhance the visual and tactile qualities of the stone itself.

(1) According to one theory the oval tubes would have served to measure sacrificial grain; according to another, they were made in pairs to be used as ceremonial cuffs.

图版II (Fogg. Jade, p. 216, 图版323)



323 Ceremonial Cuff(?)

Sturdy elliptical tube of celadon-green jade with light brown markings. The upper rim slants back at a steep angle ; it is marred by depressions and gaps at the lower point. The narrower bottom rim is uneven and battered. The surfaces are smoothed but not glossy. Western Chou (?)

Length, 113mm ; diameter at narrow end, 70mm ; thickness, 7 mm ; weight, 298g.

1943 · 50 · 627

図版Ⅲ (Fogg. Jade, p.217, 図版324)



324 Large Ceremonial Cuff (?)

Mottled green, bluish green, and buff jade ; traces of earth adhering to the surface. The shape is similar to No.323, but the slant of the wider, upper rim is moderate, while the narrower bottom rim is even. At the back, adjoining the upper rim are four concentric ridges, each forming half an ellipse. The outer surface is smooth but not glossy ; the inner wall is less carefully finished. Western Chou (?)

Length, 189mm ; diameter at narrow end, 112mm ; thickness, 7 mm ; weight, 1,034g.1943・50・628

Published : Wintrop Retrospective, no. 14.

図版IV (「故宫学季刊」第3卷第2期、2頁)



D



A



E



B



F



C

A 高18.9公分・美國 Fogg Art Museum, Harvard University 收藏

B 高15公分・美國 Minneapolis Institute of Art, Minnesoda 藏

C 高11.5公分・美國 Buffalo Museum of Science 藏

D 高14.2公分・盧芹齋 C.T.Loo 氏藏

E 高15.2公分・美國 de Young Memorial Museum, San Francisco 藏

F 高11.3公分・收藏地點同 A。

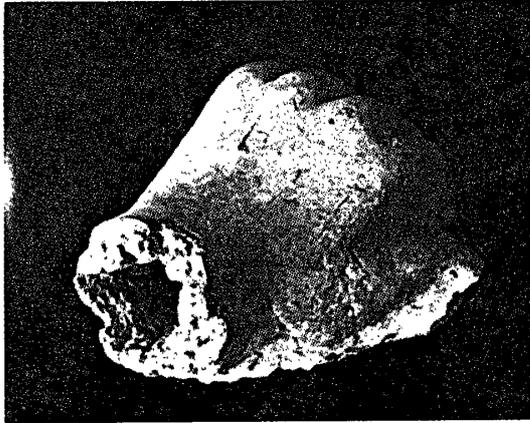
図版V (「考古」1986年第6期、図版貳一5)



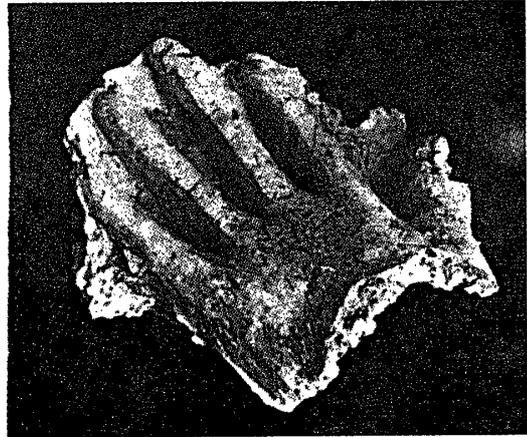
凌源県三官甸子城子山遺址出土器物
5. 馬蹄形玉筒 (M 2 : 4)

図版VI (「文物」1986年第8期、図版壹)

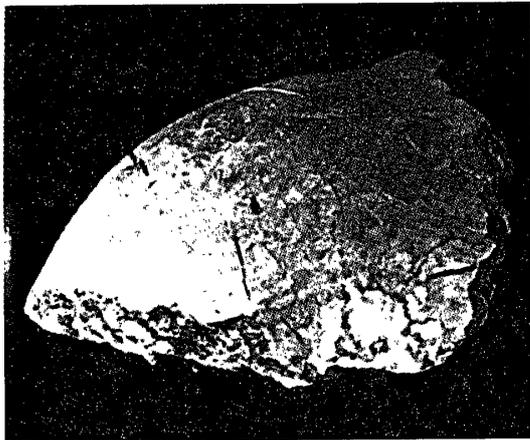
遼寧牛河梁紅山文化“女神廟”遺址出土人物塑像殘塊 図版壹



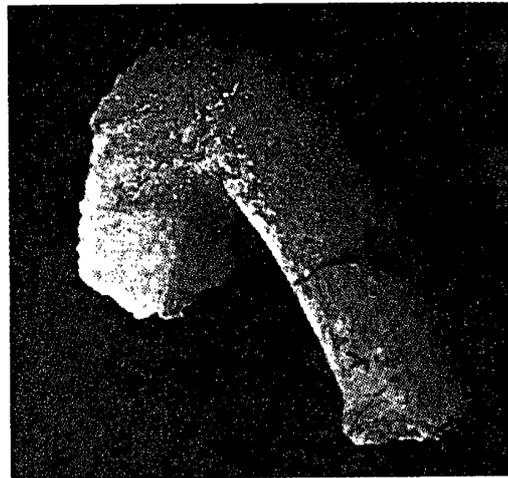
1 手 (J 1 B: 2)



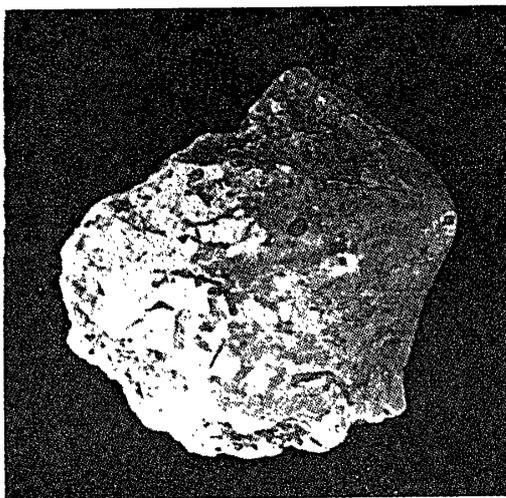
2 手 (J 1 B: 4)



3 肩头 (J 1 B: 5)



4 肩臂 (正面) (J 1 B: 3)



5 乳房 (J 1 B: 6)



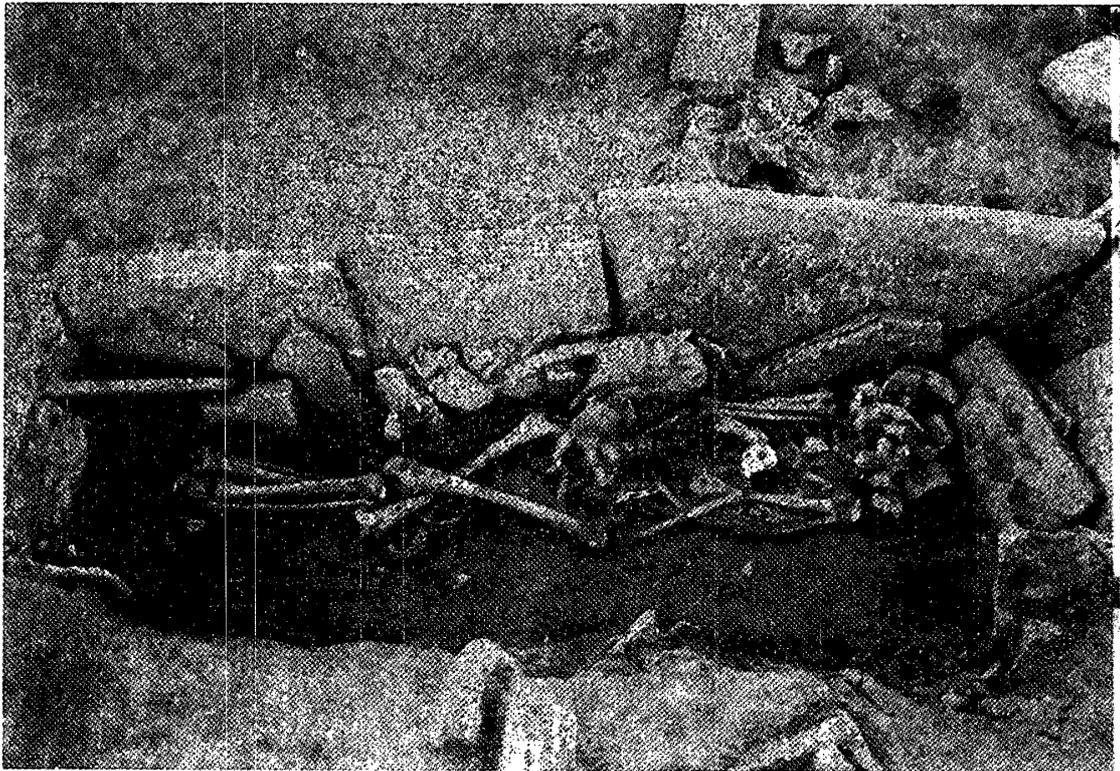
6 肩臂 (反面) (J 1 B: 3)

図版VII (「文物」、1986年第八期、カラー図版壹—3)



図版VIII (「文物」、1986年第八期、カラー図版壹—1)

彩版貳 遼寧省牛河梁第II地点、第1号積石冢第4号墓及出土物



1. 第4号墓出土情况 (自南向北攝) 墓口長1.98、寬0.4—0.55米

図一 1 (「考古」、1986年第6期、第499頁、図4)

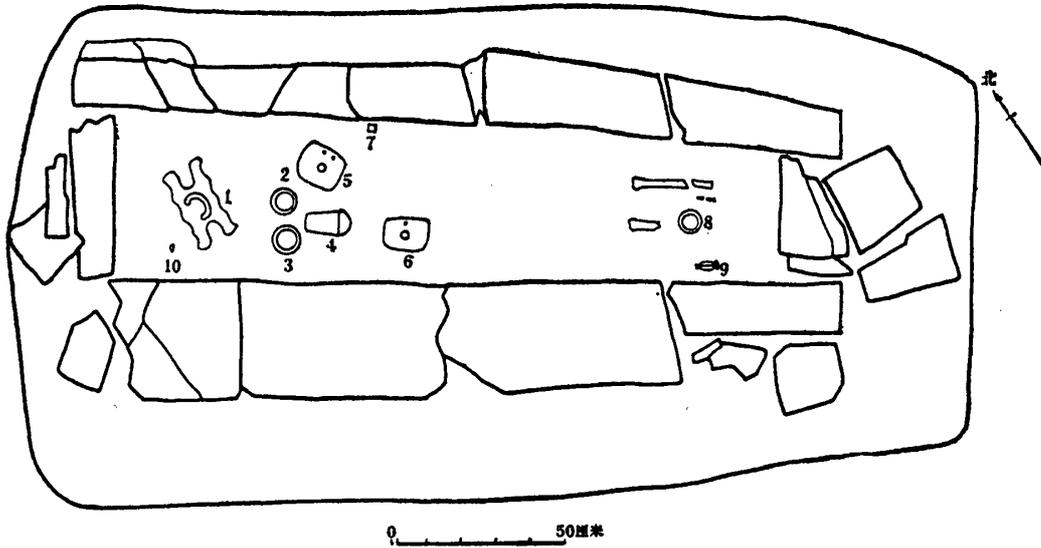
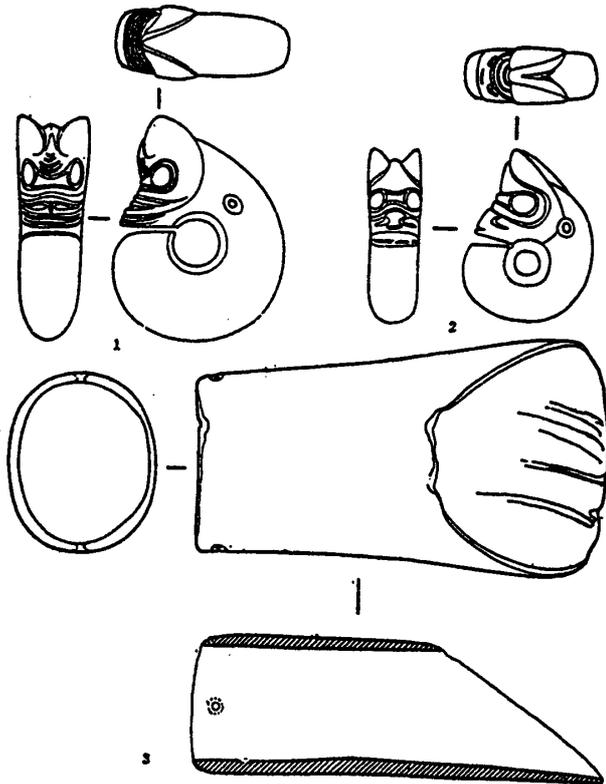


図4 M2 平面図

1. 勾云紋玉飾 2、3、8. 玉环 4. 馬蹄形玉箍 5、6. 玉鉞 7. 竹節状玉飾 9. 玉鳥 10. 人牙

図一 2 (「文物」、1986年第8期、第9頁、図11)



図一一

M 4 出土玉器

1、2. 猪龍形玉飾 (M 4、2、3)

3. 甗形器 (M 4、1)

(均为 1/4)

図一 3 (「文物」、1986年第 8 期、第13頁、図20)

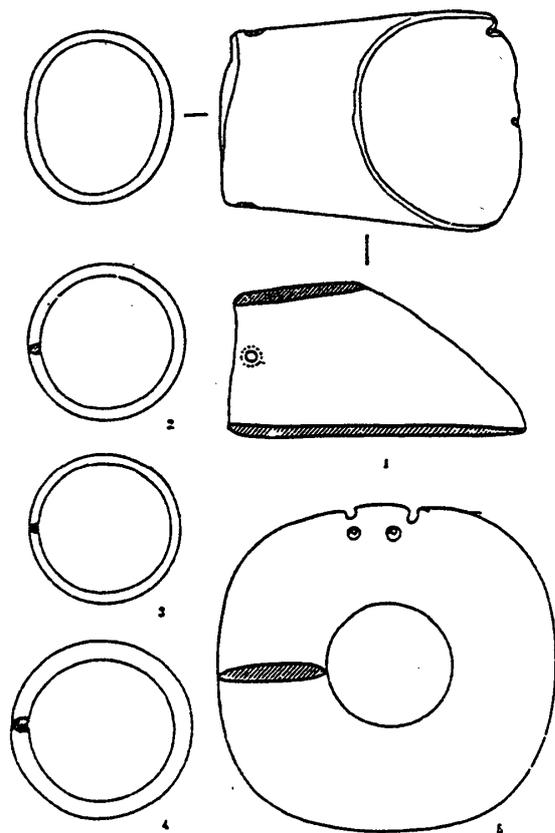


図20 M15出土玉器

- 1. 籬形器 (M15、1)
- 2-4. 环 (M15、2、3、5)
- 5. 璧 (M15、4) (均为 1/3)

図一 4 (「文物」、1986年第 8 期、第13頁、図19)

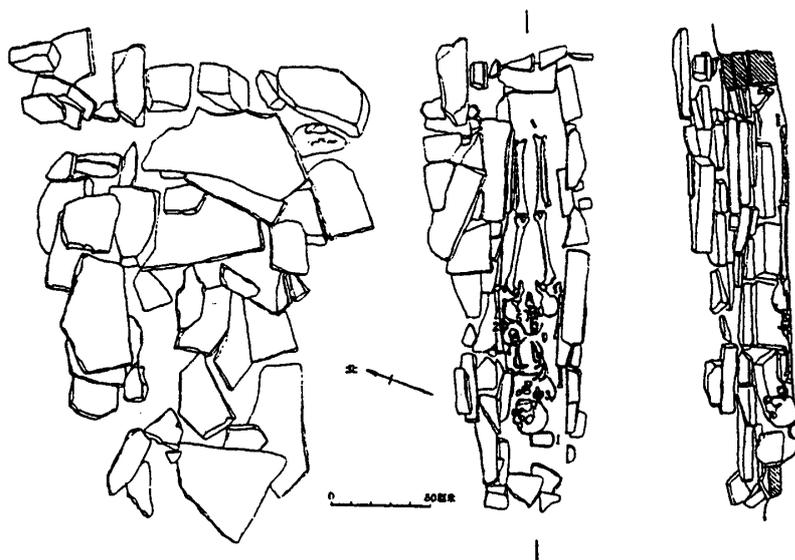


図19 M15頂部及平、剖面図

- 1. 玉籬 2、3、5 玉环 4. 玉璧

图一5 (「文物」、1984年第6期、第14页、图6)

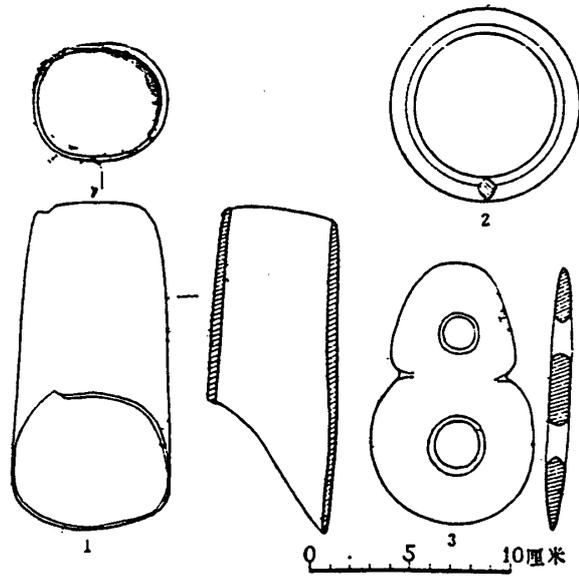


图6 1. 马蹄形玉筒、牛河梁出土
2. 玉环、牛河梁出土
3. 双联玉璧、牛河梁出土